

新課程セ試5(6)教科7科目平均点(900点満点)は、

文系型 564.2点(+16.7点)、

理系型 572.0点(+31.3点)!

基幹科目の英語、国語、数学Ⅱ・Bアップで高得点。

英語は筆記127.5点、リスニング36.3点の得点率65.5%で、
前年より14.8点アップ。

旺文社 教育情報センター 18年2月

新課程入試初年度となる18年センター試験は志願者55万1,382人、受験者50万6,459人で、ともに3年連続前年割れの中で実施された。私立大のセンター試験参加増や過去最高の現役志願率などで現役志願者は前年より1%増えたが、浪人は16%近い大幅な減少となった。

大学入試センター発表の「平成18年度大学入試センター試験実施結果の概要」によると、今回初めて実施された注目の英語リスニングテストの平均点は36.3点(50点満点)で、筆記と合わせた英語の得点率は65.5%(200点満点換算で131.0点；旺文社算出)となり、前年より14.8点のアップ。英語の他、国語、数学Ⅱ・Bといった基幹科目の平均点アップで、文系・理系の標準型—5(6)教科7科目(900点満点)—の平均点は文系型564.2点、理系型572.0点で、ともに前年より大幅にアップした。

過去のデータも含め、センター試験の実施結果をさまざまな角度から分析し、以下にビジュアルデータとしてまとめた。

文系型、理系型の「5(6)教科7科目」平均点

国公立大のセンター試験(以下、セ試)科目は、国立大を中心に5(6)教科7科目(900点満点)が主体となっている。18年は国立大の約94%、募集人員で約7万5,000人(入学定員に対する割合約78%)、公立大の約44%、募集人員で約5,800人(同、約24%)が5教科7科目以上を課せられる。標準的な受験科目の編成としては、次の2タイプである。

文系標準型(900点満点)＝国語＋地歴＋公民＋数学2科目＋理科1科目＋外国語

理系標準型(900点満点)＝国語＋地歴・公民から1科目＋数学2科目＋理科2科目＋外国語

このため、各科目の平均点と受験者数から割り出す総合平均点(加重平均点)も、文系型と理系型とに分けて算出した。なお、国語は旧「国語・Ⅰ」、理科は旧「Ⅱ・B」科目、英語は「筆記＋リスニング」の得点率を基に200点満点に換算して、それぞれ前年と比較した。

文系標準型平均点＝564.2点(前年より16.7点アップ)、理系標準型平均点＝572.0点(同、31.3点アップ)であった。基幹科目の英語(+14.8点)、数学Ⅱ・B(+5.2点)、国語(+5.9点)のアップに加え、生物(前年-11.1点+18.0点)、物理(同-2.9点+13.4点)の大幅アップに対し、現代社会(同+12.9点-12.3点)、地理B(同+8.1点-5.1点)の大幅ダウンが文系、理系それぞれの平均点アップの大幅な格差となって現れたようだ。

18年センター試験(本試) 平均点等の前年比較一覧

<18年2月8日 大学入試センター発表データより>

教科名	科目名	平成18年(最終)		平成17年(最終)		平均点の 対前年差	受験生数の 対前年差	
		受験者数	平均点	受験者数	平均点			
文系標準型平均点(900点満点)			564.2		547.5	16.7		
理系標準型平均点(900点満点)			572.0		540.7	31.3		
国語(200点)	国語	482,808	125.5	495,074	119.6	5.9	▲ 12,266	
地理歴史 (100点)	世界史A	1,524	44.9	2,046	44.3	0.6	▲ 522	
	世界史B	90,209	66.3	93,770	63.2	3.1	▲ 3,561	
	日本史A	4,835	57.6	5,155	54.8	2.8	▲ 320	
	日本史B	144,959	54.7	152,072	59.3	▲ 4.6	▲ 7,113	
	地理A	6,383	62.7	7,663	65.7	▲ 3.0	▲ 1,280	
	地理B	110,948	65.1	109,805	70.2	▲ 5.1	1,143	
公民 (100点)	現代社会	220,731	57.9	198,746	70.2	▲ 12.3	21,985	
	倫理	43,643	68.7	51,431	67.0	1.7	▲ 7,788	
	政治・経済	62,961	61.1	64,251	64.6	▲ 3.5	▲ 1,290	
数 学	数学 (100点)	数学	14,004	54.3	13,428	48.0	6.3	576
		数学・A	356,035	62.4	370,156	69.4	▲ 7.0	▲ 14,121
	数学 (100点)	数学	12,187	35.7	11,738	39.5	▲ 3.8	449
		数学・B	317,357	57.7	326,674	52.5	5.2	▲ 9,317
		工業数理基礎	86	59.2	85	59.3	▲ 0.1	1
		簿記・会計	1,071	56.6	1,120	54.9	1.7	▲ 49
	情報関係基礎	554	59.6	600	54.8	4.8	▲ 46	
理 科	理科 (100点)	理科総合B	17,375	66.7	—	—	—	—
		生物	177,901	69.6	176,849	51.6	18.0	1,052
		旧総合理科(*)	1,762	61.3	—	—	—	—
		旧生物 A(*)	2,998	57.0	—	—	—	—
	理科 (100点)	理科総合A	35,244	65.8	—	—	—	—
		化学	197,974	64.1	209,839	66.1	▲ 2.0	▲ 11,865
		旧化学 A(*)	3,929	58.9	—	—	—	—
	理科 (100点)	物理	139,620	73.4	140,528	60.0	13.4	▲ 908
		地学	26,111	59.3	18,795	64.1	▲ 4.8	7,316
旧物理 A(*)		1,553	61.4	—	—	—	—	
旧地学 A(*)		938	55.5	—	—	—	—	
外国語 (200点)	英語	筆記(200点)	499,630	127.5	520,048	116.2	11.3	▲ 20,418
		リスニング(50点)	492,555	36.3	—	—	—	—
		筆記+リス(200点)	—	131.0	—	—	—	—
		ドイツ語	106	155.9	102	133.1	22.8	4
		フランス語	141	134.6	149	132.0	2.6	▲ 8
		中国語	397	170.6	372	169.1	1.5	25
		韓国語	189	155.3	213	158.1	▲ 2.8	▲ 24

<注> 文系標準型平均点(900点満点)は、国語(200点)、地歴と公民2科目受験(200点)、数学と数学の2科目受験(200点)、理科(、 、 合わせて集計100点)、外国語(200点;英語は筆記<200点>+リスニング<50点>を200点に換算)の加重平均点。
 理系標準型平均点(900点満点)は、上記文系型の地歴と公民を合わせ(1教科として集計100点)、理科を2科目(2科目受験組及び3科目受験組における平均点の高得点2科目から算出した200点)とする5教科7科目の加重平均点。
 国語の17年受験者数は旧「国語+国語」、平均点は旧「国語」のそれぞれデータを掲載。
 工業数理基礎、簿記・会計の17年受験者数及び平均点は、それぞれ旧工業数理、旧簿記のデータを掲載。
 物理、化学、生物、地学の17年受験者数及び平均点は、それぞれ旧「B」科目のデータを掲載。
 理科の*印科目は、旧課程履修者に対する経過措置のための科目。
 文系・理系とも、大学入試センター発表の科目別平均点(小数第2位まで)と受験者数をもとに旺文社が算出(小数第1位まで)。
 5教科6科目(文系・理系共通の800点満点を900点満点に換算)の加重平均点は、566.6点で、17年より26.1点のアップ。
 得点調整は、対象科目間の最大得点差が「物理-地学」=14.1点で、20点差以内に収まり、実施されなかった。

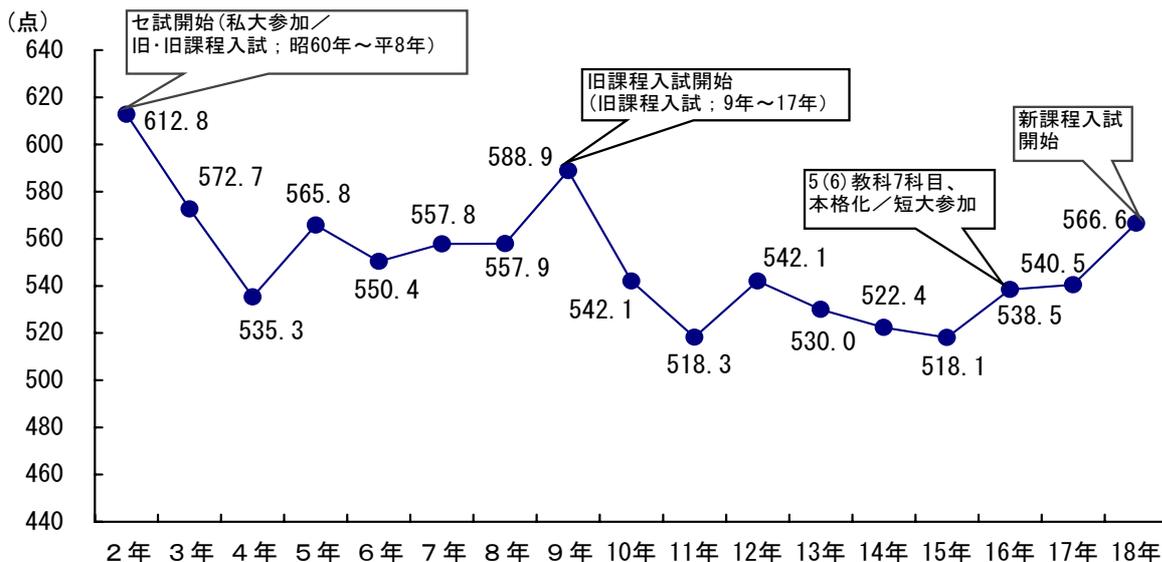
■5教科6科目(文・理系型共通)平均点の推移

過去の文・理系型共通の5教科6科目の平均点(加重平均点、800点満点)と比較するため、18年の5教科6科目平均点を算出した。結果は900点満点換算(以下、同)で566.6点となり、前年より26.1点アップした。平成2(1990)年のセ試開始から、18年までの5教科6科目平均点の推移を下図に示した。

4年(前々回の教育課程による旧・旧課程入試)は英語、数学、物理などのダウンで、平均点は前年より37.4点ダウンした。9年は旧課程入試の始まった年で、数学・A、数学・B、英語のアップで平均点は、8年より31.0点アップした。10・11年とも、国語・、数学・A、英語などのダウンで、特に11年の平均点は518.3点(得点率57.6%)まで低下した。14年は物理B、数学・Bの大幅ダウン、国語・の大幅アップで、「文高理低」となり、平均点は522.4点。15年は、英語の大幅アップに対し、国語・と数学・Bが大幅にダウン。結局、基幹3科目のアップ・ダウンが相殺する形となったが、平均点は11年をわずかに下回る518.1点で史上最低を記録。16年は国立大を中心に5(6)教科7科目化が本格化し、国語・の大幅アップをはじめ、数学・A、英語のそれぞれアップなど、基幹3科目の上昇が全体の平均点を大きく押し上げた。旧課程入試最後の17年は、英語が13.9点ダウンしたものの、国語・の5.4点、数学・Bの6.8点アップに加え、数学・Aが小幅なダウン(-0.8点)に留まったこと、受験者の多い選択科目の日本史Bや地理B、現代社会、化学Bなどがアップしたことから、前年より2.0点アップした。

新課程入試初年度の18年は、前述のように基幹科目の英語、国語、数学・Bなどのアップで、26.1点の大幅アップとなった。制度改革や教育課程の改訂に伴う出題科目や内容等の変更時は、これまでいずれも平均点アップとなっていたが、今回も同様の結果となった。

●センター試験(本試)5教科6科目平均点(文・理系型共通;900点満点に換算)の推移



注) 大学入試センター発表の科目別平均点と受験者数から、5教科6科目(地歴・公民合わせて100点、理科1科目として100点<文・理系型共通>の800点満点)の加重平均点を旺文社が算出。16年からの5(6)教科7科目(900点満点)に合わせ、900点満点に換算。

初実施の英語リスニングは、36.3点(50点満点)の高得点

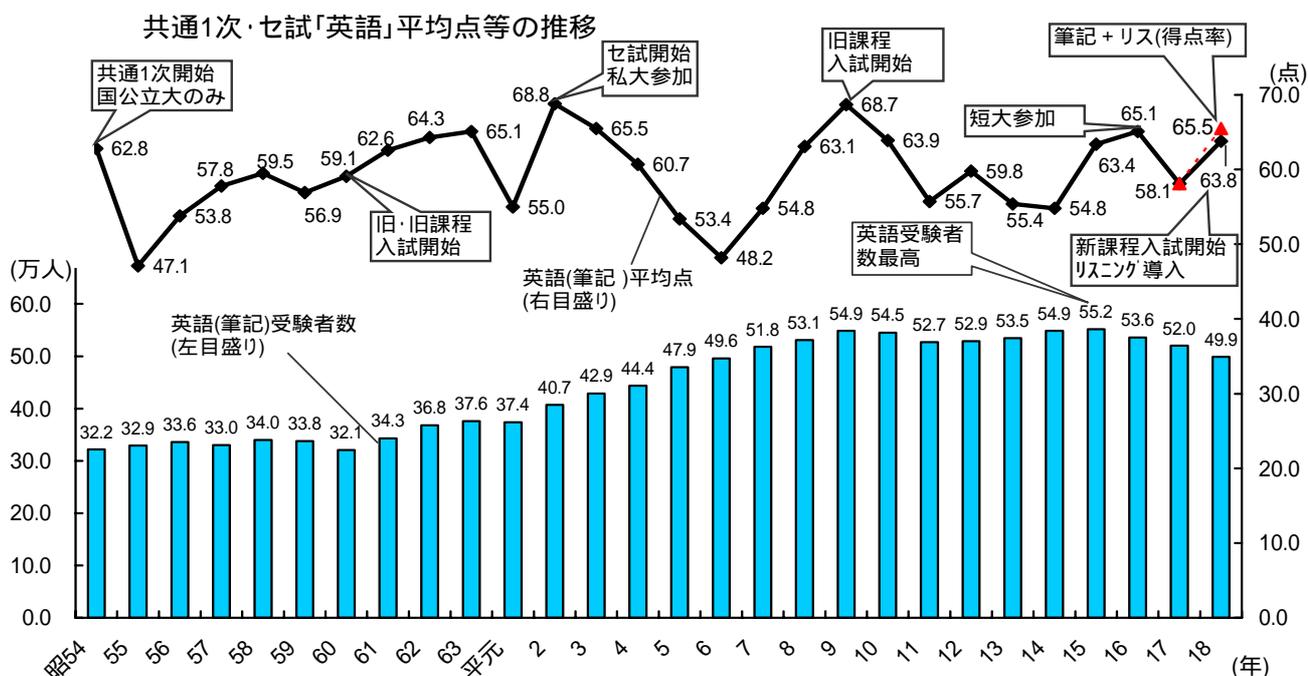
リスニングテスト(以下、リスニング)はセ試の前身である共通1次試験(昭和54<1979>年~平成元<1989>年)時代から検討されてきたが、音響上の公平性の問題点や設備・技術上の問題等、多くの課題が指摘され導入には至らなかった。

現行の学習指導要領(15年度から実施)では、国際化、グローバル化の急速な進展に対応して、これまでの「読み・書き」主体に、「聞く・話す」を加えた(4技能)「実践的コミュニケーション能力の育成」を一層重視している。こうした英語教育の改善・充実に合わせ、新課程入試初年度の18年セ試からリスニングが導入されることになった。

今回実施されたリスニングは、一般入試において、国立大96%、公立大92%、私立大64%でそれぞれ合否判定に利用(筆記とリスニングの得点次第ではリスニング不採用の場合も含む)される。こうした状況の下、リスニング受験者は49万2,726人(追・再試験含む)で、選択率(リスニング受験者数/全受験者数×100)は97.3%だった。

なお、1月21日(本試)のリスニングでは、ICプレーヤーの不具合などから457人が同日、リスニング終了後に別の機器で再テストを受けた。また、これとは別に当初の再テスト対象者12人のうち、9人が1月28日(追・再試験)の再テストを受けている。

注目されていたリスニングの形式・内容・問題量などは、ほぼ試行テスト(16年9月実施)を踏襲。難易度は「易~標準」(全体としては英検準2級程度)で、比較的聞き取りやすかったため高得点につながったようだ。筆記は形式・内容・問題量など、ほぼ前年どおりで、平均点は11.3点アップ。リスニングと筆記とを合わせた加重平均による得点率は65.5%(200点満点換算で131.0点;旺文社算出)で、前年より14.8点の大幅アップとなった。



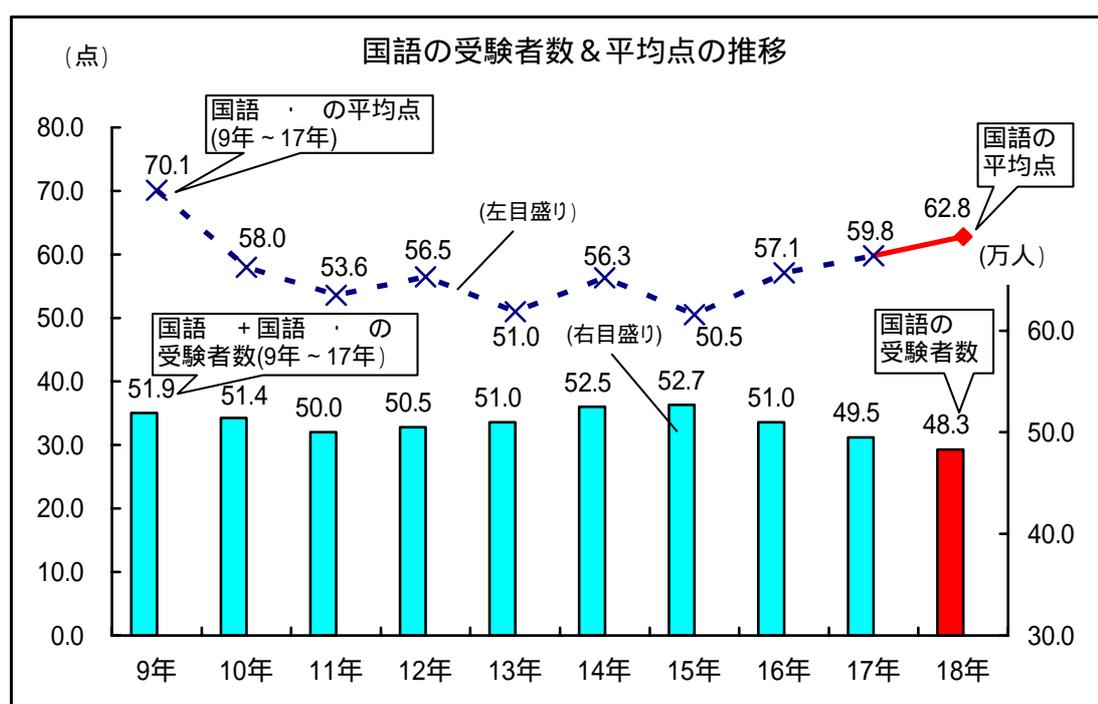
注1. 各年とも、200点満点を100点満点に換算。18年は「筆記」の平均点(100点満点換算)と、その受験者数を表示。
 2. 18年の「筆記+リスニング」は、得点率(65.5%)を破線で表示。

国語の受験状況

英語に次いで受験者の多い国語は、旧課程では国語 と国語 ・ の 2 科目(受験者数は圧倒的に国語 < 国語 ・)が出題されていたが、その違いは科目の特性から必ずしも明確ではなく、両者の大幅な平均点較差(過去 9 年間のうち、7 回(本試)が国語 > 国語 ・)などを問題視する向きも少なくなかった。

旧課程入試開始の 9 年の国語 ・ の平均点は 70.1 点(100 点満点に換算。以下、同ノ国語 は 75.4 点)と高得点であったが、翌 10 年には 58.0 点(国語 は 71.2 点)と大幅にダウンしている。その後は、50 点台のアップ・ダウンを繰り返してきた。15 年に 50.5 点の最低を記録した後、上昇傾向にあったが、旧課程入試最後の 17 年は 59.8 点で 60 点に届かなかった。

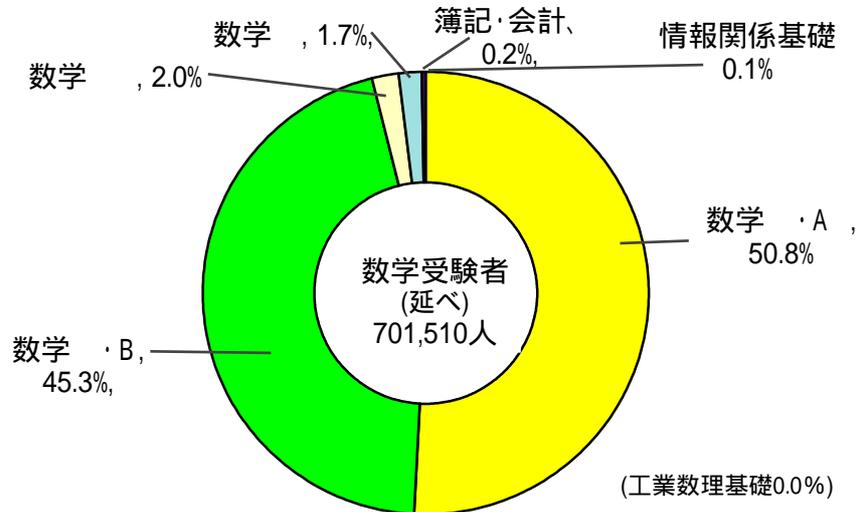
新課程入試開始の 18 年から、出題は「国語」1 科目に再編され、出題形式や分野(近代以降の文章 2 題、古文 1 題、漢文 1 題)などに変更はなかったが、平均点は前年の国語 ・ (旧課程)に比べ 3.0 点アップの 62.8 点と、9 年に次ぐ高得点であった。



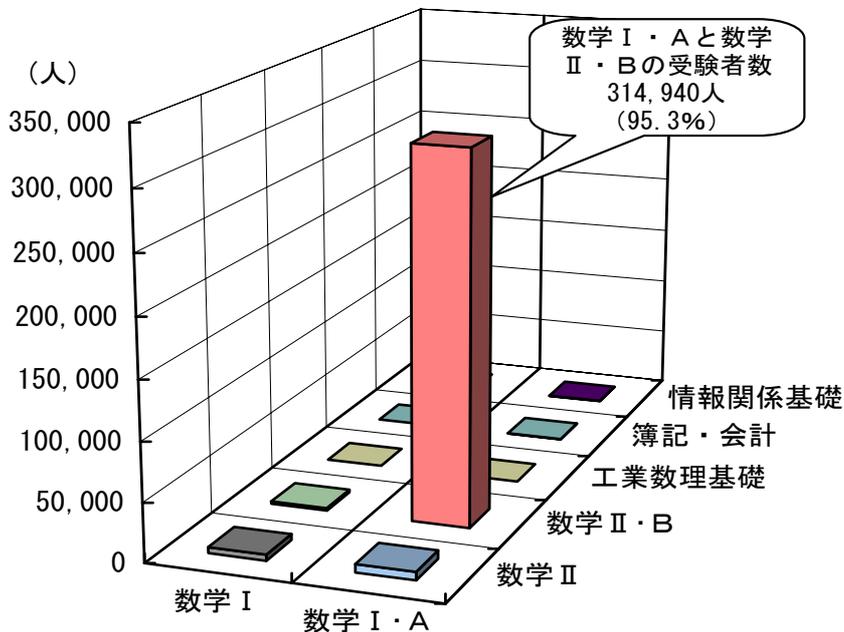
- 注 1. 旧課程入試(9年~17年)は、国語 I 及び国語 I・II の 2 科目出題。新課程入試(18年~)では、国語 1 科目のみの出題。
 2. 200 点満点を 100 点満点に換算。

数学2科目受験は、数学Ⅰ・Aと数学Ⅱ・Bで約31万5,000人(95.3%)

数学延べ受験者の構成比(追・再試験含む)



●数学2科目受験者の内訳(追・再試験含む)



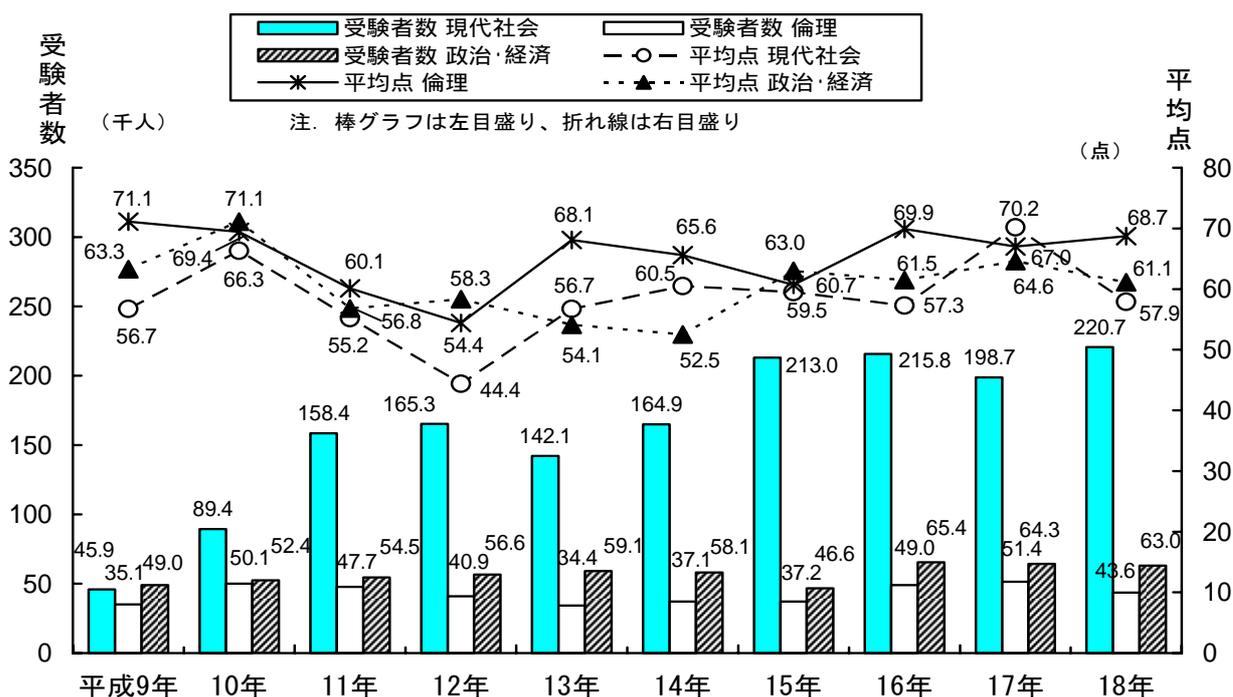
	数学Ⅱ	数学Ⅱ・B	工業数理基礎	簿記・会計	情報関係基礎
数学Ⅰ	5,065	2,159	19	217	93
数学Ⅰ・A	7,011	314,940	64	374	369

各教科受験者減の中、公民は唯一、1.3万人(4.1%)増。現社の平均点、大幅ダウン
 9年に社会が地歴と公民に再編されて以降、公民の方が地歴より与し易いとみられ、地歴
 から公民への受験生の流れや、高得点を期待した“公民保険”を掛ける「地歴・公民ダブル
 受験」の傾向が見られた。16年は国立大を中心とした文系の6教科7科目化で、公民
 は文系標準型の“必須科目”となったことなどから、史上最多の受験者数を記録した。17
 年はセ試全体の受験者減に伴い、公民の受験者も16年より約1万6,000人(4.8%)減った。

18年の公民は、時間割が前年までの2日目最終枠から第1日目の1時間目に移り、初日
 が文系科目でまとまったことや、前年の現代社会の高得点などから、軒並み受験者減とな
 った教科の中で唯一、受験者を約1万3,000人(4.1%)増やした。

公民各科目の受験者数の増・減は、当該科目の前年平均点のアップ・ダウンに影響されて
 いるようだ。16年に公民でただ1科目平均点アップした倫理は翌17年、受験者を5.1%増や
 し、18年は前年大幅な平均点アップ(+12.9点)した現代社会のみが2万1,985人(11.1%)
 増えた。公民の受験者増は現代社会によるが、その平均点は12.3点の大幅ダウンとなった。

公民[現社・倫理・政経]の受験者数 & 平均点の推移 (本試験)

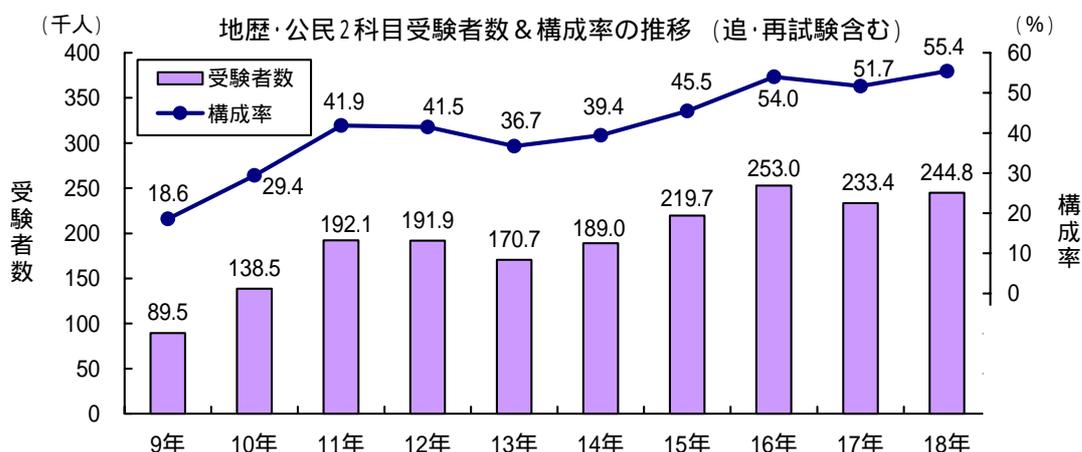


- 11年までは現社の受験者数が毎年倍増し、12年には公民全体としてそれまでの最多を記録した。しかし、平均点は下降傾向にあり、12年は現社と倫理で史上最低となった。
- 14年は、前年に平均点が大幅アップした現社と倫理で受験者が増え(現社 16.1%、倫理 7.7%)、全体としても前年比 10.4%の増加に転じた。
- 15年は、倫理と政経が前年の平均点ダウンから敬遠され、受験者数は、倫理が前年並み、政経が19.9%減となったものの、現社は前年より約4万8,000人(29.2%)増えた。
- 16年から公民は文系標準型の“必須科目”となり、16年の公民受験者は33万人超の史上最多となった。
 18年はセ試時間割の変更で、公民は従来の第2日目最終枠から第1日目の1時間目に移り、第1日目が文系科目でまとまったことなどから各教科受験者減の中、唯一、公民受験者は増えた。公民の中では、前年の平均点アップと高得点などから、現社のみが約2万2,000人(11.1%)増えたが、その平均点は12.3点の大幅ダウンとなった。

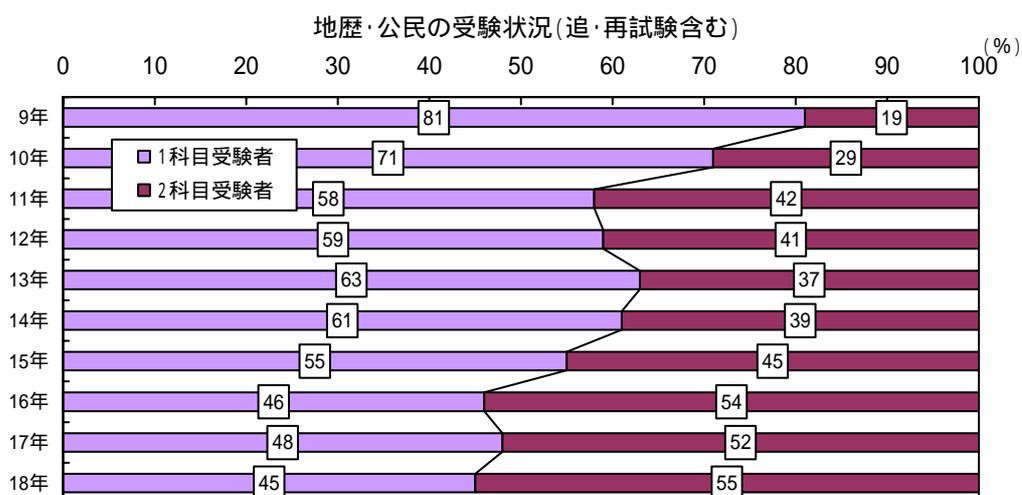
地歴・公民2科目の受験者増加、構成率は史上最高の55.4%

地歴・公民2科目受験は前述のように、高得点を期待する“公民保険”による傾向が強く、11年までは2科目受験者数が激増した。12・13年は減少したが、14年から再び増加に転じた。16年は5(6)教科7科目化で、国立大の文系を中心に地歴・公民2科目必須となったため、2科目受験者は一気に増え、約25万3,000人の史上最多を記録。地歴・公民受験者に占める2科目受験者の割合(構成率)も初めて50%超となった。17年は、2科目必須の大学・学部は前年より増えたが、セ試全体の受験者数減に加え、前年の公民平均点ダウン(倫理を除く)による“公民保険”組の減少などで、2科目受験者数、構成率とも前年を下回った。

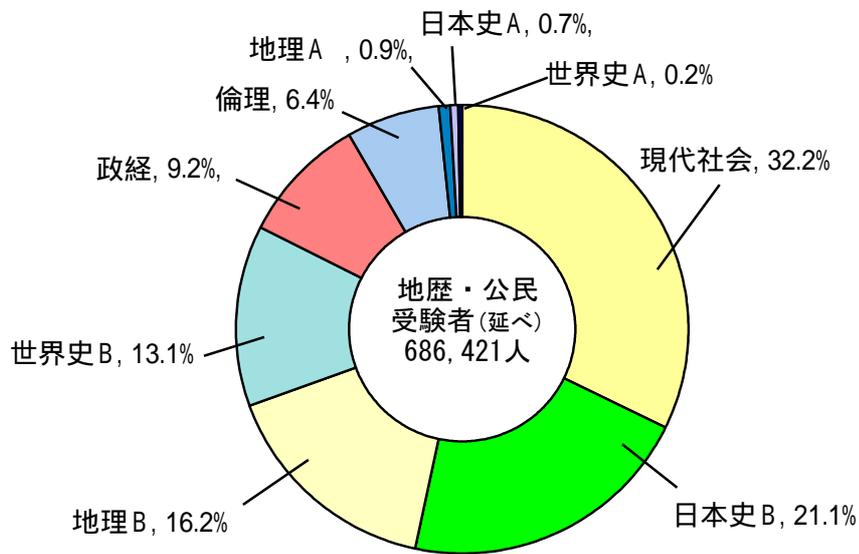
18年は国立55大学118学部、公立10大学13学部で地歴・公民2科目必須で前年とほぼ同じであったが、時間割の変更で地歴と公民が午前中にまとまったことなどで、2科目受験者数は前年より約1万1,000人(4.9%)増の約24万4,800人となり、地歴・公民受験者に占める割合も史上最高の55.4%に達した。



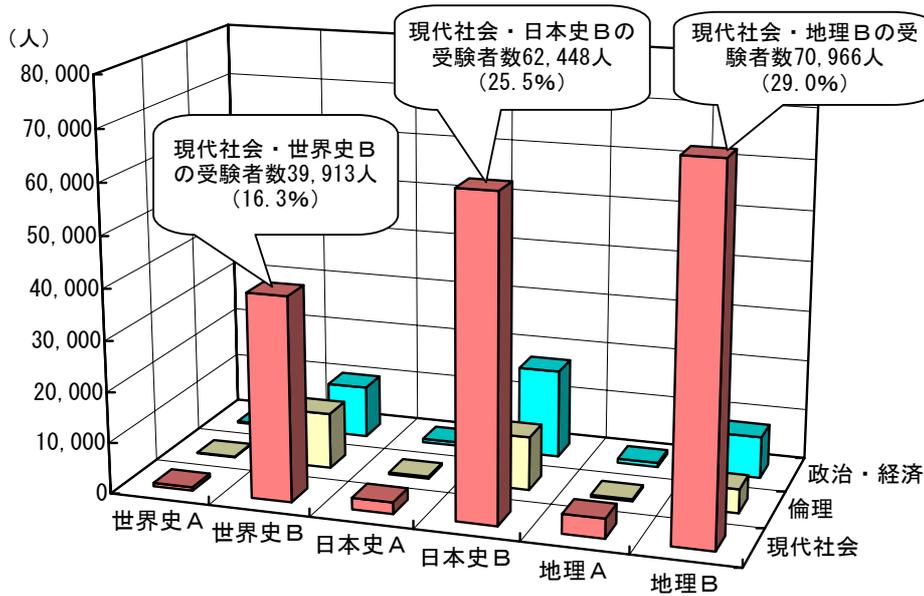
注: 「構成率」は、地歴または公民の実受験者数(1科目・2科目受験)に占める、2科目受験者数の割合。



地歴・公民延べ受験者の構成比率(追・再試験含む)



●地歴・公民の2科目受験者の内訳(追・再試験含む)



	現代社会	倫理	政治・経済
世界史 A	687	130	211
世界史 B	39,913	10,966	10,253
日本史 A	2,277	409	700
日本史 B	62,448	10,482	17,497
地理 A	3,817	405	817
地理 B	70,966	4,672	8,190

理科2(3)科目受験者は約2万6,000人(10.4%)減少

受験生の理科離れや学力低下、履修科目の不揃いなどを背景に、理系を中心に理科2科目化が進み、2科目受験者は17年まで毎年増加していた。特に、16年は5(6)教科7科目化により理系を中心に国立68大学238学部、公立21大学32学部で2科目必須になったことに加え、試験枠が増えて3科目受験が可能になったことなどから、2(3)科目受験者数(3科目受験者含む。以下、同)は一気に増えて24万人超となり、理科受験者に占める2(3)科目受験者の割合(構成率)も62.6%に達した。17年は、理科2科目必須とする国公立大(学部)の増加に加え、総合理科を含む2(3)科目受験の増加により、2(3)科目受験者数は前年より約7,700人(3.2%)増の約24万8,700人の史上最多を記録し、受験者の構成率も67.2%に達した。

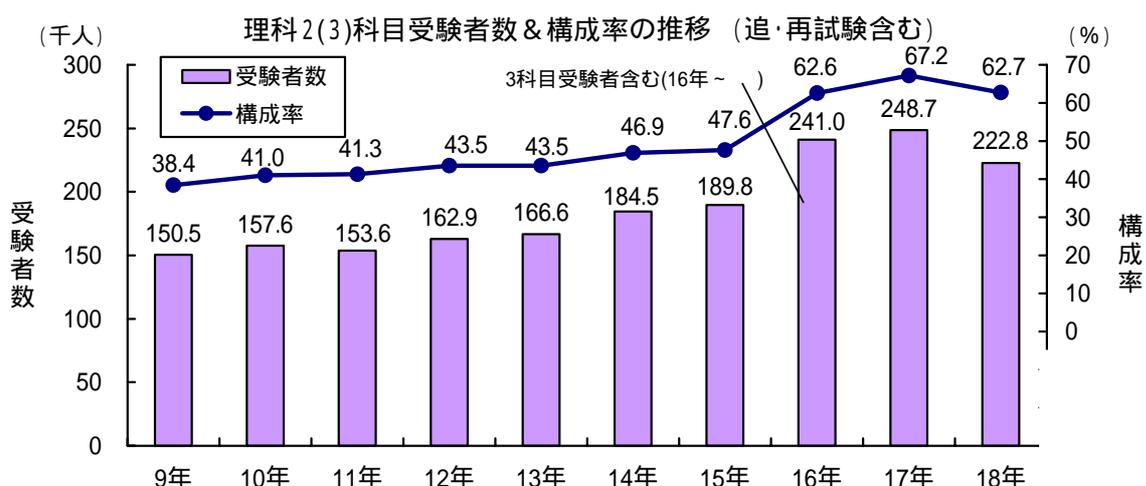
18年はセ試全体の受験者減や時間割の変更による試験枠の分断(17年までは、第1日目の後半に3コマ連続)などの影響で、理科の受験者数は前年より1万4,995人(4.1%)少ない35万5,153人であった。国公立大における理科2科目必須の増加や医学部(医学科)での3科目必須(5大学5学部)もみられたが、理科2(3)科目受験者数は前年より2万5,938人(10.4%)減の22万2,773人で、構成率も前年より4.5ポイントダウンの62.7%だった。

<理科総合A VS. 理科総合B>

18年から、旧課程の総合理科は理科総合A(物理・化学分野)と理科総合B(生物・地学分野)とに再編された。旧・総合理科は文系受験者等を中心に高得点を期待する“総理保険”として受験者を毎年増やし、17年の受験者数は約7万9,000人で、理科受験者(延べ)に対する構成率も12.2%を占めていた。

初出題の理科総合Aの受験者数は3万5,255人、理科受験者(延べ)に対する構成率は5.8%だった。一方、理科総合Bの受験者数は1万7,378人、構成率は2.9%。出題初年度の理科総合Aの受験者数は、理科総合Bのちょうど2倍となった。

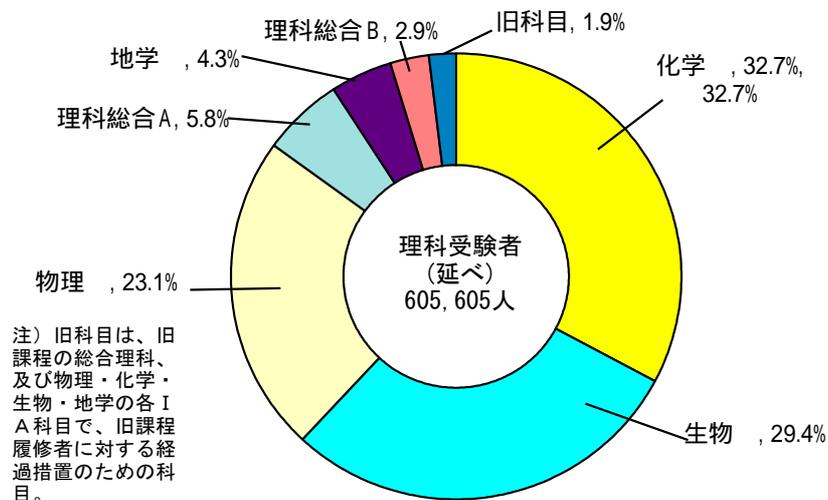
なお、平均点は理科総合A = 65.8点、理科総合B = 66.7点で、ともに高得点であった。



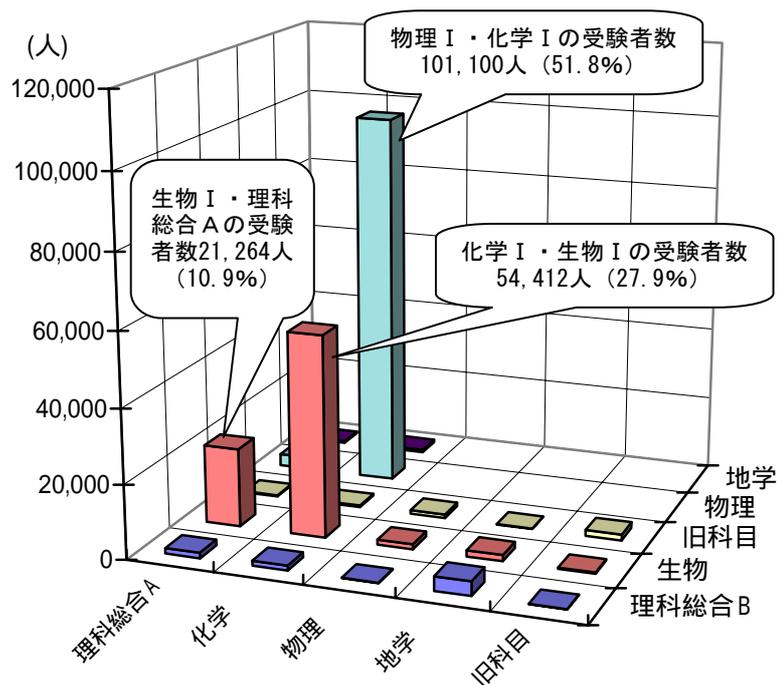
注1. 16年以降は理科3科目受験も含む(16年から3科目受験が可能)。

注2. 「構成率」は、理科の実受験者数(1・2・3科目受験)に占める、2科目受験者数(3科目受験も含む)の割合。

理科延べ受験者の構成比率(追・再試験含む)



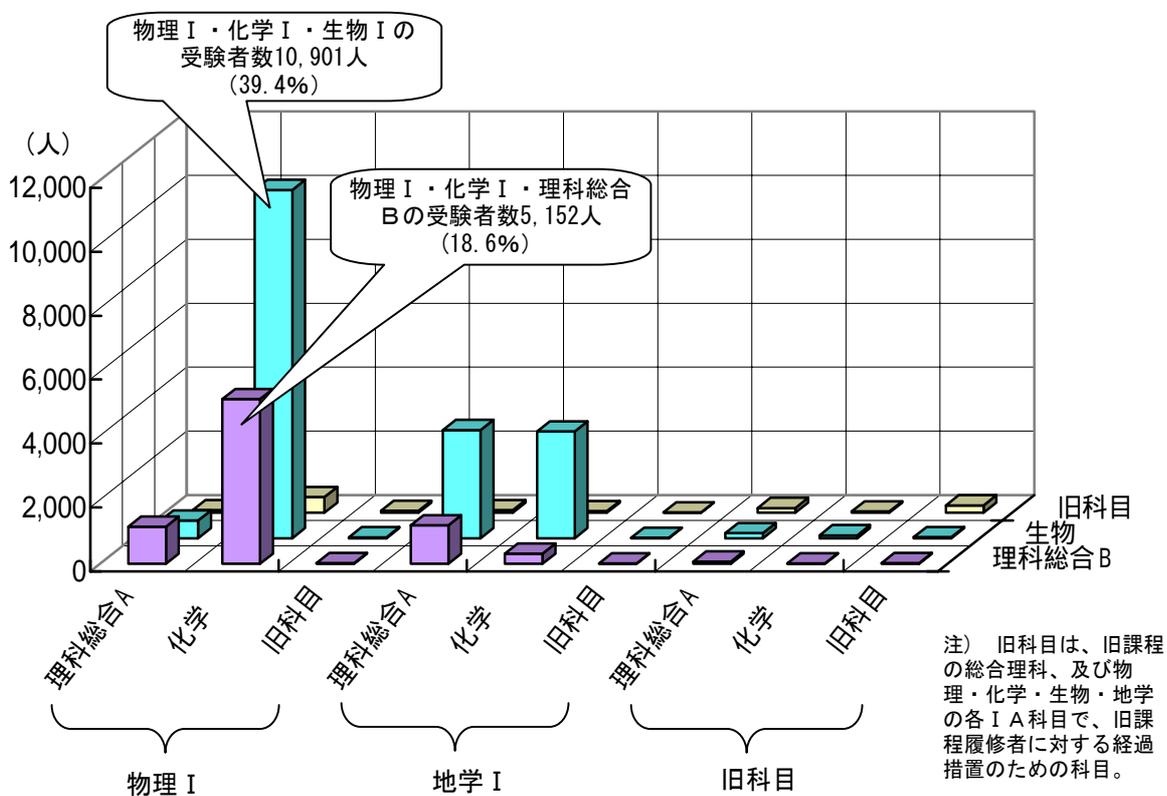
●理科2科目受験者の内訳(追・再試験含む)



注) 旧科目は、旧課程の総合理科、及び物理・化学・生物・地学の各 I A 科目で、旧課程履修者に対する経過措置のための科目。

	理科総合A	化学 I	物理 I	地学 I	旧科目
理科総合B	1,501	1,334	120	3,855	68
生物 I	21,264	54,412	1,366	1,698	301
旧科目	355	451	993	145	1673
物理 I	3,243	101,100	—	—	—
地学 I	485	730	—	—	—

理科3科目受験者の内訳(追・再試験含む)

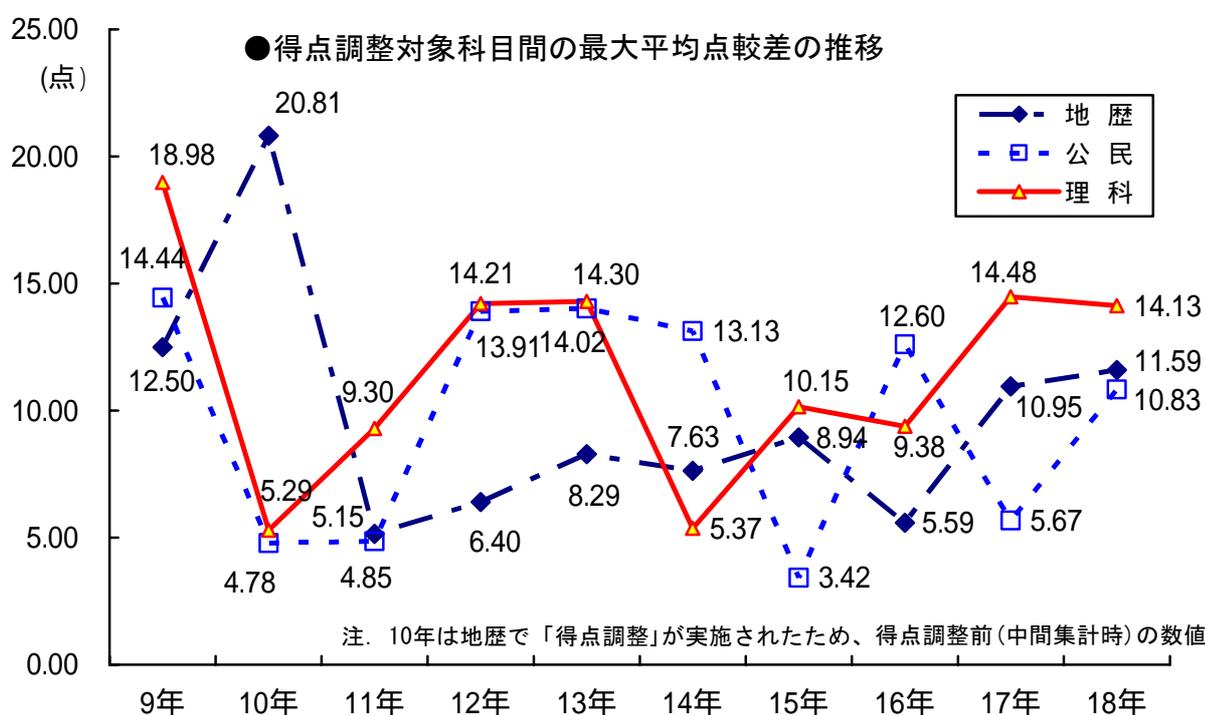


理科③		物理 I			地学 I			旧科目		
理科②		理科総合 A	化学 I	旧科目	理科総合 A	化学 I	旧科目	理科総合 A	化学 I	旧科目
理科①	総合理科 B	1,155	5,152	17	1,201	317	7	64	10	19
	生物 I	553	10,901	31	3,386	3,342	16	160	91	39
	旧科目	86	494	62	84	56	14	149	41	232

得点調整対象科目の平均点較差

セ試の選択科目間における大幅な平均点差に対しては、「得点調整」が実施される場合がある。得点調整は、「地歴のB科目間、公民の各科目間、及び理科の各<I科目>間で、原則として20点以上の平均点差が生じ、これが試験問題の難易差に基づくものと認められる」と、実施される。

下図は9年以降の得点調整対象科目間の最大平均点差の推移を示したものである。18年の得点調整対象科目間の平均点差をみると、地歴；世界史B - 日本史B = 11.59点、公民；倫理 - 現代社会 = 10.83点、理科：物理 - 地学 = 14.13点で、いずれも得点調整のガイドライン以内に収まり、得点調整は実施されなかった。



<得点調整の実施>

これまでの得点調整実施の有無をみると、10年は地理Bと日本史Bとの平均点差(地理B > 日本史B)が20点以上(中間集計時点)となったため、世界史Bも加えた地歴3科目間で得点調整が実施された。

グラフにはないが、共通1次時代(前々回の教育課程による旧・旧課程入試)の平成元(1989)年にも理科で実施(物理・生物の得点を修正)された経緯がある。

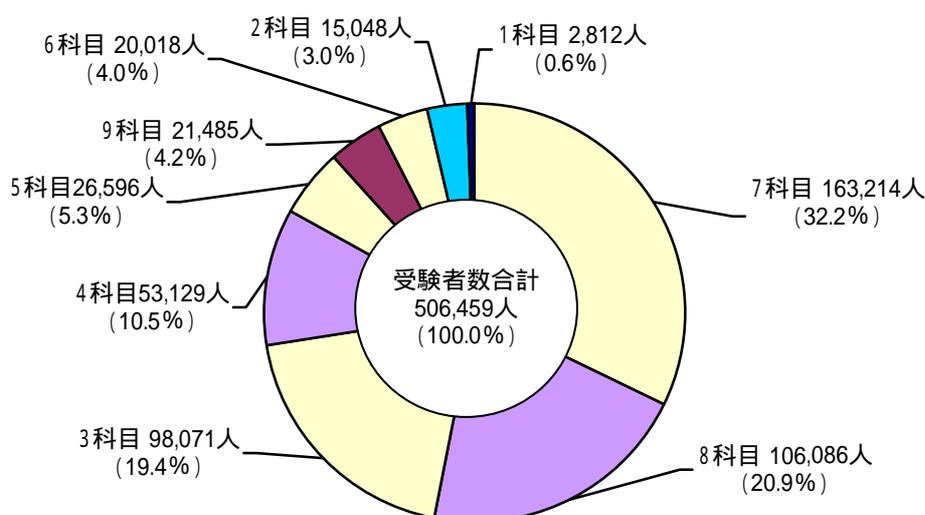
注) 旧課程入試(9年~17年)の得点調整対象科目は、地歴と理科のB科目間、及び公民の各科目間。

受験科目数別の受験状況

18年からの新課程セ試は6教科28科目(旧課程は6教科32科目)から出題され、最大9科目まで受験できる。国公立大のセ試科目は15年まで、5教科6科目が主流であったが、16年からは国立大を中心に5(6)教科7科目が主体となり、18年は国立大の約94%、入学定員の約78%、公立大の約44%、入学定員の約24%がそれぞれ5教科7科目以上である。

他方、私立大のセ試利用入試科目の大半は2、3科目だが、多数科目受験の場合、高得点科目が採用される。このため、7科目以上の受験率は年々アップ、特に16年以降は急増している。

18年センター試験 / 受験科目数別受験者数



注.()内は受験者数合計に対する当該科目受験者数の割合。

●センター試験 / 受験科目数別受験率の推移 (%)

